

サラが見つけてきた《ロンドン・キャット・コンテスト》は、コナンが事前に想像していたより大きなイベントだった。

会場となったのはトラファルガー広場。その一角に舞台が生まれ、簡易なステージが作られている。ステージ前方には大勢の人が押し寄せており、その人々を誘うようにフィッシュ・アンド・チップスやサンドイッチの街頭商人、さらには大道芸人まで出張っていた。まるでちょっとしたお祭りだ。
フェスティバル

「……世の中には暇な奴が多いんだな」

「何を言ってるの、コナン君。こんな変わり種のイベントなんて、ロンドンっ子の好物じゃない！」

「だから、『君』は止める」

浮かれるハドソン家の次女に、コナンは苦い顔で応えた。

マリー・ハドソンはいつものスーツ姿で、カメラまで肩に掛けている。なんでも今日は新聞社の取材も兼ねているらしい。

会場を訪れているのは、コナンとマリーの他、アーサーとターナとサラ。もちろん、ワガハイを連れた銀助もいる。人混みが得意ではない銀助は、ワガハイの入ったバスケットを両手に抱え、落ち着かない様子で周囲を見回していた。

「ロンドンで猫を飼ってる人間が、こんなに多いとは思いませんでした」

不安そうにつぶやく銀助に、「同感だ」とコナン。

マリーがエントリーのために並ぶ参加者たちを眺めながら、

「何しろ優勝したら賞金二十ポンドだからね。わざわざ遠くから来てる人もいるんじゃない？」

「気前のいい話だ。主催者は何者だ？」

「《愛猫組合》って団体らしいけど、詳しいことはわからないわ」

「こんなにたくさんいて、ワガハイが優勝できるでしょうか……」

「大丈夫だよ、銀助ちゃん！　ワガハイちゃんは可愛いもの！」

イベント特有の空気のおかげか、マリーもサラも上機嫌だ。二人を見守るターナも、いつも以上にこやかな気がする。

実際、これだけ賑やかな催しはコナンも久しぶりだった。また、その賑やかさの中に、あちこちで聞こえる猫の鳴き声が混じっているのが新鮮である。時折騒ぐ慌てたような声や悲鳴は、連れてきた猫が何かやらかした結果だろう。逃げる飼ひ猫を必死で追いかける紳士や淑女も、

少なからず目に付いた。

コナンは苦笑したが、

「……まあ、たまにはこういうのも悪くない」

ステイプルトンの一件があったあとだ。あまり気乗りはしていなかったのだが、案外気分転換には良かったかもしれない。

「ところで、銀助？ いい加減申し込みに行った方がいいんじゃないか？」

「そうですね……緊張しますが……」

「不安なら私もついてあげようか？」

「ああ、いえ。大丈夫ですよ、サラちゃん。夏目家の男児たるもの、この程度で気後れしてはおられませんし」

そう言うと、銀助はワガハイが寝ているバスケットをぎゅっと抱えて、エントリーの列に歩いて行った。がんばれー、とサラが声援を送る。

やれやれ、と銀助を見送ってから、コナンはアーサーの方に首を向けた。

「にしても、お前まで来るとは思わなかったな。人混み嫌いは、銀助の比じゃないだろうに」

「……その銀助に付いて来いと言われたからだ。貴重なサクラダイトの提供者だからな。無碍にはできない」

早くも洪面を浮かべるアーサーは、いかにも不服そうに言った。外で緊張しすぎるぐらいなら、家に籠もって新しい発明に没頭していたいのだろう。

「そう言えば、昨日あのと、またステイプルトンの屋敷に出向いたんだっただよな？ お前が気にしてたメイドには会えたのか？」

「……ああ。会ったよ。収穫もあった」

「その割には不機嫌そうだが？」

コナンが尋ねると、アーサーは小さく舌打ちする。

「あのメイド、僕らが初めて会ったときは、ずいぶんと印象が違っていた。ベリル嬢が言っていた通り大人しいがテキパキとした娘で、こちらの質問にも、すぐに、明確に、答えを返していた」

「それは確かに別人みたいだが、俺たちが会ったのは二回だけだしな。前は緊張していたんじゃないか？」

「本人に確認したが、よく覚えていないらしい。記憶はあるが、上手く思い出せないとか」

「……それもまた妙な話だ」

「実に、な。嘘を吐いている風でもなかったが、どうにも腑に落ちない。まるで別人みたいに人が変わってー」

とー

そこで急にアーサーは黙り込んだ。

一瞬見開いた双眸が、ナイフの切っ先の如く細まる。

「……………」

アーサーは左手で右肘を抱きかかえると、右手の人差し指を伸ばし、静かに唇に添えた。真剣な面持ち。視線が宙に消え、焦点が失われる。彼が本格的に思考している証拠だ。

「お、おい、アーサー。こんなところで」

コナンが慌てるが、もう相棒の耳には届かなかった。

「……………そう。あのメイドだけじゃない。そもそも事件の発端は、ロジャール・ステイプルトンの性格が一変したことだ。そして……………確かクロエ・ノートンも。彼女もある時期から突然、人が変わったように社交界に出入りし始めていたはず……………待てよ。変貌というなら、宝石商のウィリアム・クラムだってそうだ。突然目の前で……………」

半眼で棒立ちになったまま、ぶつぶつと何事か小声でつぶやくアーサー。その異様に没頭した姿に、コナンはつい口をつぐんだ。
すると、

「なんだ、なんだ。お前さんたちがこんな催しに顔出すなんて珍しータツ、ターナさん！ いや、いや、ミス・ハドソン！ こんなところでお目にかかれるとは！ た、大変結構な日よりでー……………」

ニヤニヤとコナンたちに近付いて来た男が、ターナを見て直立不動になった。クラウス・レストレード警部だ。

「あら、レストレード警部」

とターナが微笑むと、たちまち顔を真っ赤にする。

マリイが意外そうに、

「警部こそ、こんなところで意外だわ。まさか警部もコンテストに参加するの？」

「な、何を馬鹿な。俺は犬派だ！」

「えー、猫ちゃん可愛いのに。ねえ、ターナお姉ちゃん」

「そうね。猫は可愛いわね」

「え？ あつ、もちろん猫だって大好きなんですよ、ターナさん？ ただ、今日は半分仕事でして」

三姉妹に翻弄されるクラウスに、コナンは苦笑を隠しながら助け船を出す。

「仕事というと、会場の警備ですか？」

「いや。お偉いさんの護衛だよ。正確には、元お偉いさんーと言っても、引退したいまも政

府各所に結構な影響力をお持ちの方でな。上司から休日返上で護衛を仰せつかっちゃった」

「なるほど。本来の業務ではないんですね」

「つつても、拒否権はねえんだがな？ おまけにこれがまた気難しい爺様で、朝から散々振り回されてる。宮仕えの辛いところさ」

「その割には護衛対象がいらないじゃないですか」

「駆り出されたのは俺だけじゃねえから……ああでも、噂をすればだ」

クラウスがちらりと振り返ると、三人の男たちに囲まれ、一人の男に押された、車椅子の老人が近付いて来た。

かなりの高齢だ。また酷く痩せ細っている。

しかし、彼がまだ強い精神を有していることは、その鋭い眼光を見れば明らかだった。

「知り合いかな、レストレード君」

「ええ、ミスター・メリーウエザー。こちら、コナン・ワトソンとアーサー・ホームズ。それに、彼らの下宿先である、ハドソン家の三姉妹です」

「ちよっほ、メリーウエザーつてージョン・メリーウエザー？ 前内閣の黒幕^{フイクサー}って噂だった、銀行家の！？」

マリーの台詞に一同がぎょつとしたが、メリーウエザーはニヤリと笑うのみだった。

「ああ、良いのだ。今日は僕の個人的な楽しみで来ておるのだからな。ワトソン。それに、ホームズか。ちなみに、ホームズというのは『あの』ホームズかね？」

メリーウエザーが微かに顔を上げ、クラウスに確認した。クラウスは「ええ、まあ」と首肯する。この老人はクラウスから、アーサーの「探偵」としての活躍を聞いているのかもしれない。

もつとも、アーサーはと言えば、いまだにクラウスにすら目も向けず黙考し続けている。相棒の無礼な態度にヒヤリとしたが、メリーウエザーは気にする素振りを見せなかった。

「ともあれ、今日の主役は僕でもなければ、他の人間どもでもない。この子たちだよ」
そう言つて、膝の上で丸まっている、一匹の猫を撫でた。

スマートな、美しい猫だ。しっぽがないーというより、極端に短い猫だった。しかも目の色が左右で異なっている。

コナンが、おや、と思つていると、

「ほっほ。気がついたかね？ この子はマンクスという種で、マン島の猫だ。ノアの箱船に飛び乗る際、尾が扉に挟まれたという伝説がある珍しい猫でな。しかもこの美しいオッドアイはどうだ。これほど希少な猫は見たことがなからう？」

「は、はあ……」

得意げに語るメリューエザーに、コナンは生返事をする。

「僕は五十匹以上の猫を飼っていてな。どれもが希少で美しい猫たちだが、この子はその中で
もずば抜けている。せつかくの機会だ。よく見ておきたまえ」

「ど、どうも……」

「ほんとに綺麗！ ねえ、お爺ちゃん？ 撫でてもいい？」

「お、おい、サラっ」

「ほほっ。構わんとも。だが、優しくな。この子は少々、気性が荒い」

メリューエザーが忠告すると、サラは頷きながら、そっと老人の猫を撫でる。猫はちらっと
片目を開けて少女を見たあと、気にすることなく毛並みを撫でさせた。クラウドはかなりハラ
ハラしているようだが、飼い猫を撫でさせる老人は、好々爺とした笑みを浮かべていた。

「猫は良い。その在り様が高貴だ。下手な人間より、よっぽどな。そうは思わんか、レストレ
ード君」

「ハッ。仰る通りかと」

「……警部は大派手……」

「なんと言っても、自由なのがいい！ その精神は、ここイギリス共和国に相応しいものでし
よう！ ワハハ！」

大声で誤魔化しつつ、ギロリとらんでくるクラウドに、コナンは首を竦めて見せる。

そこへ、バスケットを抱えた銀助が戻って来た。

「皆さん、受付は無事終わりましたよ……おや、レストレード警部？ ご無沙汰してます」

「おう、銀助——あ、そうか。お前さんとこ、猫が居たな。それで来てるのか」

クラウドが納得して頷いた。対して、銀助は見知らぬ男たちと車椅子の老人に気付いて、ぱ
ちくりと瞬きをする。

一方、メリューエザーはワガハイを見ると、目を光らせた。

「むっ。三毛猫^{キャリコ}か。君が飼い主だな。その黒髪に黒い瞳。中国人かね？」

「あ、いえ。日本人です」

「日本人か。確かニッポンでは『ミケ』と呼ぶのだったな。なかなか太々しい面構え——ハッは
まさかその『ミケ』、オスではあるまいな？」

「いえ、メスですが……」

「ほっ。一瞬ひやりとしたわ。そうか、メスカ。三毛猫^{キャリコ}のオスとあらば、さすがに敵わぬとこ
ろだったが……いやいや、このコンテスト、気が抜けぬな」

くつくつと楽しげに笑う老人に、銀助は幾分頬を引きつらせて、コナンに説明を求める視線
を向けた。コナンは人差し指を立てて唇に当てる。クラウドではないが、余計な波風は立てな

いに限る。

「とはいえ、やはり三毛猫キャリコは珍しい。どうかね？ 君が良ければ、言い値で譲る気はー」

「あ、ありません」

「残念だ。では、子供が産まれたら、ぜひ知らせてくれ。すべて儂が買い取ろう。ああ、ただし三毛猫キャリコだけだぞ？」

「はあ……」

銀助は目を白黒させている。なるほど、この辺りの強引な押し強さは、いかにも「元お偉いさん」らしい。

もつとも、サラに撫でられていた猫が、ニャアと泣き声を上げると、メリーウエザーはたちまち「おお、そうか」と相好を崩した。

「どうやら腹が減ったらしい。この辺で失礼しよう。このあとのコンテスト、楽しみにしているぞ。ではな」

そう言つて、メリーウエザーと男たち、それにクラウドは去って行った。

見送ったコナンたちは、ぽかんとしていたが、

「信じられない！ メリーウエザーって言ったら、表に出てこない影の実力者として有名なのに、それがまさか、こんなところで！ 大スクープだわっ。くーっ、写真撮らせてもらえば良かった！」

堪えきれない様子でマリーが叫んだ。

「そんな大物なのか？」

「当たり前でしょ！ 政財界のキャスティング・ボードを握る人物よ？ あんな愛猫家だったなんて……うわー、取材したいっ。銀助君、ワガハイをダシに、もう一回接近してみない？」

「……その前に、私まだ状況が把握できてないんですけど……」

銀助は情けなさそうな表情で戸惑っていたが、「あ、それより」と話を変えた。

「参加者はあちらの天幕に集まるそうです。皆さん一緒に参りましょう。人が多いですから、サラちゃんはみんなとはぐれないように気を付けて」

そう言つて、銀助が先頭に立ち、移動を開始する。

三姉妹が後に続き、コナンも、

「おい、アーサー。行くぞ」

と、いまだに独りで黙考しているアーサーに声をかけた。

アーサーはまだ無言のまま、のろのろとコナンの後ろに続く。

どうやら、歩きながらも考え事は続いているらしい。「転ぶなよ」とコナンは苦笑したが、アーサーは返事をしなかった。まあ、付いてくるだけマシだろう。

参加者たちが集まる天幕というのは、ステージを挟んだ反対側にある。コナンは銀助たちを見失わぬよう、人混みの中を縫うように進む。そのときだ。

「足下がお留守のようよ？ 気を付けて、ホームズさん」

背後で聞こえた声は、確かにどこかで聞き覚えがあった。

コナンが反射的に振り返る。すると、すぐ後を付いて来ていたアーサーも、同じく肩越しに背後を振り返っていた。それも、彼が滅多に見せないほど真剣な表情だ。

「ア、アーサー？ いま、誰かー」

「静かに！」

アーサーは人混みのただ中で足を止め、四方に鋭く視線を投げる。全神経を集中して、何かを——いや、さっきの声の主を——捜しているのだ。

コナンも慌てて首を左右に向けたが、周囲の人混みは刻々と入れ替わり、流れ続けている。声の主を見つけ出すなど、到底不可能だった。

「……アーサー」

しばらくして声をかけ直すと、アーサーも息を吐いて肩を落とした。彼もさすがに諦めたらしい。

「さっきの、俺の聞き間違いじゃないよな？ 覚えがある声だが、思い出せない。お前は誰だったかわかるか？」

「ああ……」

アーサーは苦い顔で応える。ただ、彼の表情に反し、その瞳は好奇心で輝いているよう見えた。

「我らが元依頼人、アイリーン嬢だ。まったく……とんだ『猫』が紛れ込んでるな。このコンテスト、俄然興味が湧いてきたよ、コナン」

*

「うーん、惜しかったねえ、銀助ちゃん」

「審査員の評価が高かっただけに残念だな。あれなら優勝もあるかと思ったが」

「私もです……これでニッポン・キャットの名を、世に知らしめられると期待したんですが…

…」

ベーカー街221Bのリビングに、コナンたちが集まっていた。《ロンドン・キャット・コンテスト》が閉幕し、帰宅したところだ。

ターナはお茶を淹れに出ていて、コナン、マリー、サラ、銀助が中央テーブルを囲んでいた。アーサーは《電気炉》の側の肘掛け椅子で足を組み、独り、紙巻き煙草をくゆらしている。

コンテストの結果は、ワガハイの惜敗に終わった。グランプリに輝いたのは、メリーウェザーのマンクスだ。三毛猫キャリコは審査員や観客たちの間でずいぶん珍しがられたのだが、総合的な「美猫」としての見栄えから、オッド・アイのマンクスが選ばれた形である。「愛嬌」ならワガハイも負けてはいないが、「美しさ」となると分が悪いのは——残念ながら——事実だろう。

もつとも、当然ながらワガハイ自身は、周りの落胆など気にも止めない。いまでも、参加賞で与えられた鰻のパイを、床でのんびりと咀嚼している。

一方、憤っているのは、マリーだ。

「写真NGなら、先に告知しておくべきじゃないっ？ 記事にするのも駄目だとか、横暴よ、

横暴！」

「主催者側の要望だ。仕方ないしろ」

「普通は大々的に宣伝してもらえたら喜ぶものよ？ それが、自分たちで猫の会報を出すから、余所の取材は受けないなんて！」

「まあ、向こうも優勝賞金を出してるわけだしな。その会報の売り上げで元を取りたいんだろ。なんて言ったっけ？ 《愛猫組合》だったか？」

コンテストは盛況だったし、これで《愛猫組合》とやらのメンバーも増えるだろう。ひよつとすると、それが主催者側の狙いだったのかもしれない。

「あのご老人も取り上げられるんですよね？ 正直、羨ましいですね」

「そういや、明日インタビューするって言ってたわね。ていうか、メリーウェザー氏にインタビューが出来るなんて、私だって羨ましい！ 特ダネよ、特ダネ！」

「でも、飼猫のことに関してでしょう？ マリーちゃんが狙ってるインタビューとは違うんじゃないませんか？」

「メリーウェザー氏のインタビューってだけで価値があるの！ とにかくマスコミ嫌いだし、表に出てこない人なんだからっ。ああ、羨ましいっ、ていうか、ズルい！」

マリーは歯噛みしたが、さすがに筋違いと言うべきだろう。そもそも、愛猫家たちの催しに、自分の都合を持ち込む方が間違っているのである。

ともあれ、イベントは無事に終了。ひよつとすると《愛猫組合》は強力なパトロンを得ることになるかもしれないし、万事丸く収まったというところだろう。

ただ、やはり気になるのは……。

「……なあ、アーサー？ さっきの『声』のことだが……本当に間違いないのか？ あの、アイリーン嬢だったと？」

「僕の耳は確かだ」

「どうですかねえ？ あんな騒音を好んで奏でるような耳では……」

「うるさいぞ、銀助。今回の接触は、明らかに向こうの意思によるものだ。隠す気などさらさらないので、間違えようがない」

アーサーは盛大に煙草の煙を吹き出した。

コナンは「しかし」と首を捻る。

「とすると、いまさらなんなんだ？ 手紙を回収して欲しいって依頼は取り下げられたわけだし、第一、事件の真犯人だったウィリアム・クラムの店には、アイリーン嬢の手紙はなかった」

「……そして、代わりに割れた仮面があった」

「そう言えば、その件もわからずじまいだな。とにかく、いまさら現れた上に、依頼の件には一切触れずに立ち去るなど、わけがわからない」

「わけがわからないわけがあるか。起きた事象のみを観察すれば単純明快。先方はメッセージを伝えに来た。それだけだ」

「……とすると、その肝心のメッセージが『足下がお留守』なのか？ やはりわけがわからないぞ？」

「……………」

コナンの疑問に言い返すことなく、アーサーは椅子に深く座ったまま、紫煙をなびかせる。やはり彼も、アイリーンのメッセージに関しては、意味を捉えかねているのだ。

マリイが唇を尖らせながら、

「うーん、足下がお留守、ねえ？ それって、普通に考えたら忠告だよな？」

「そうだな。それも、身近な危険を知らせる忠告だろう」

「あ、そっか。アーサーくん、いつも床、散らかしてるから！」

「もっと整理整頓をしないと？ だとすると素晴らしい忠告ですね。コナン君はその方に感謝しなければ」

「その程度の忠告でこいつの散らかし癖が改まるなら苦労はないし、『君』付けは止めてくれ、銀助」

「いや、どうかなあ？ アイリーンさん綺麗だったし、美人に言われたら、案外コロツと改善したりするかもよ？」

皆が好き勝手に意見を述べる中、アーサーは険悪な面持ちで、「ケツ」と煙草をくゆらせる。組んだ足先をぶらぶら揺らし、

「いいかね、諸君？ 先方はコンテストの会場で接触してきた。だが、僕らがあのコンテストに出向いたのは、完全な偶然だ。とすれば、先方からの接触も、偶発的な結果である可能性が高い」

「そうか？ 元々接触するタイミングを計っていたのかもしれないじゃないか」

「それなら、これまでに幾らでも機会はあった。現に昨日も、僕は单身ステイプルトンの屋敷を訪問しているわけだしな。というより、忠告だけなら、電報でも十分なはずだ」

「じゃあ何か？ アイリーン嬢は、あのコンテストを見に来てて、たまたま見つけたお前に忠告をしたと言うのか？」

「……情報が少ないから断言はできない。が、少なくとも、いまある材料から考えれば、その可能性が一番高い」

アーサーはそう言ったが、自分でもいまひとつ納得がいかない様子だった。

「つまり、そのアイリーンって人も、猫が大好きだったんだね！」

「まあ、あの人が猫を可愛がってるところは、ずいぶん絵になりそうだけどね」

サラの感想に、マリイが頷く。

コナンはしばらく考えたあと、

「……しかし、アーサー？ アイリーン嬢が会場でお前を見かけて忠告してきたんだとすると、やはり何に関する忠告なのか理解できないぞ？ 接触したのが偶然なら、忠告というのも『その場で気付いた危険』に関してってことにならないか？」

「あっ。わかりましたよ。ひよっとしてアーサー君、そのとき靴紐が解けていたんじゃないかありませんか？」

「わお。銀助君、鋭い。それならまさに、『足下がお留守』だわ」

「ほんとだ！ 銀助ちゃん、すごい！」

「いやあ」

マリイとサラに褒められて、銀助が照れ笑いを浮かべる。

しかし、アーサーは茶化すでもなく、コナンの台詞を反芻していた。

「『その場で気付いた危険』？ あり得るが……では、なんだ？ 『足下がお留守』……身近な危険……あの場で？ メリーウェザー老のことか？ いや、しかし……ぶつぶつと、またアーサーが己の思考に没頭し始める。

これは長くなりそうだ。そうコナンが思ったときだ。

突然、アーサーが椅子から立ち上がり、鋭く背後を振り向いた。

驚く一同を余所に、廊下に繋がるドアへと矢のような視線を突き立てる。

直後、

「誰か開けてくれないかしら？ お茶を持って来ましたよ」

ドア越しにターナが言った。室内に弛緩した空気が流れ、マリーが「お姉ちゃんか」と息を吐く。コナンが慌てて立ち上がり、ドアを開けた。紅茶セットをトレイに載せたターナは、「ありがとう」と札を言いながら部屋に入った。

その、ターナを。

アーサーは火を吹くような眼光で、じっと凝視している。

「遅くなってごめんなさい。みんな、何で盛り上がっていたの？」

「謎のメッセージだよ、ターナお姉ちゃん」

「メッセージ？」

「そう。お姉ちゃんも聞いてよ。ほら？ ちょっと前にアーサー君に依頼に来た、凄く綺麗な女の人がいたでしょ？ 殺された友達の人から、手紙を回収して欲しいって」

「え？ ……あ、ああ、あの人。アイリーン・ドイルさんだったかしら？」

「そうそう。アイリーナーえ？」

マリーが小首を傾げて言葉を途切れさせ……。

「何者だ！」

斬り付けるように、アーサーが叫んだ。

ターナが口角をもたげ、ニンマリと苦笑した。

「これはしたり。失礼した」

ターナが言った。

というより、それはまるでターナの口から、言葉が独りでに漏れ出たかのようだった。

コナンがーそして、他の全員がー青ざめて硬直する。直後、ターナの眼球がぐるりと回り、その全身から力が抜け落ちた。

「くっ！？」

素早く駆け寄ったアーサーが、崩れ落ちるターナを間一髪抱きかかえる。ターナの手から滑り落ちた紅茶セットが、耳障りな音を立てて、飛び散り、砕け、薄紅色の熱湯を撒き散らした。

「コナン！」

アーサーの叫び声に、コナンは打たれたように全身を震わせ、慌ててターナの状態を確認する。

「……こ、呼吸はしている。脈も……早いが、正常だ。って、おいつ、アーサー!? 何をしてる!」

「……変装ではないな。まあ、こんな精巧な変装など、聞いたこともないしな。ターナさんに間違いない。だが、いまのは? あれは一体……!?」

ターナの顔を直に触りながら、アーサーが唸るように言った。内心の混乱を隠そうともしていない。こんなアーサーは初めて見る。

マリもサラも、そして銀助も、息を呑んで言葉を失っていた。

「……あ、あら? あらあら? 私ったら、急に、こんなターナが目を覚まし、パチパチと瞬きました。」

「ごめなさい。立ち眩みかしら? ああ、ああ……全部床にこぼしちゃって。あ、危ないから、そのまま動かないで。カップもソーサーも割れちゃったわ。私が片付けるから、そのまま……」

ターナは顔を赤らめつつ、身動きしてコナンの腕の中から立ち上がった。

そんなターナに、アーサーは、

「……ターナさん?」

「はい?」

アーサーの問いかけに、ターナはきよとんとしながら返事した。

アーサーはゆっくりと生唾を飲む。その顔には、まだ色濃く驚愕が残っていた。

「ターナお姉ちゃん、大丈夫!」

「ええ。ごめんなさい、サラ。嫌だわ。私、どうしちゃったのかしら」

心配する妹に苦笑いする様子は、コナンがよく知る大家の孫娘、三姉妹の長女ターナ・ハドソンに間違いない。まるで直前の出来事の方が見間違いか何かだった気がしてくる。

コナンは相棒の反応を見た。アーサーがまだ混乱しているのは明らかだ。が、それでも彼はゆっくりと立ち上がると、顔を引き締め、正面からターナの目を見つめ、問いかけた。

「ターナさん。アイリーン嬢のフルネームを、どこで、いつ知ったのですか?」

アーサーの言う通り、アイリーンは「アイリーン」としか名乗らなかつた。だが、いまさつきターナは口にしたのだ。「アイリーン・ドイル」と。

それが彼女の本名かどうかはわからないが……。

「彼女の? ええと……あら? いつだったかしら? ごめんなさい。わからないわ」

「では別の質問です。ターナさんはさっきードアの前に立つまで気配がしなかつた。もっと具体的に言えば、足音を完璧に殺していました。あのメイドと同じだ。どうしてですか?」

「どうしてって……さ、さあ？ 私は別に、そんなつもりは……」

「昨日も。ステイプルトン姉妹が訪問した際、貴方は足音を殺していたし、僕のことをいつものように『アーサーさん』ではなく『ミスター・ホームズ』と呼んだ。そのことを覚えていますか？」

「ど、どうだったかしら？」

アーサーの質問に、ターナは戸惑いながら答える。いまや部屋中の人間が、息を潜めて二人のやり取りを見守っていた。

「昨日からいままでの記憶は、きちんとあるんですね？」

「も、もちろんよ？ ……ああでも、立ち眩みしたときのことは、あまり覚えていないけど……」

「昨日僕がベリル嬢にメイドのことを話している際、貴方はじつと僕の様子をうかがっていました。僕がそのことに気付いた直後、貴方は突然台所のことを忘れていたと言って部屋を出た。僕の疑惑を逸らすように。そのこと、覚えていますか？ そして、なぜメイドの話題を、あれほど気にしていたのですか？」

「ええと……ご、ごめんなさい。覚えてはいるのだけど、どうしてかって言われても……」

「なるほど。つまり、記憶はあるが、上手く思い出せない？」

「そ、そうね。ごめんなさい」

「なら……さっきの最後の台詞はどうです？ 『これはしたり』と」

「え？ 私、そんなこと言ったかしら？」

そう答えるターナは、本心から戸惑っているようだった。

コナンの全身に嫌な汗が浮かぶ。

対して、アーサーが太々しい笑みを過らせた。

「まるで一時的に『人が変わった』ようですね。いつから……ステイプルトンの事件に関わっているところに異常はなかった。少なくとも、あのあとか。フフ……結構。確かに僕は、足下がお留守だったらしい。わざわざの忠告、痛み入る。そして……アイリーン嬢は元々、あのイベントに関心があった。なら、あのイベントには、まだ何かある」

アーサーは熱の籠もった声でつぶやいたのち、ぎらぎらとした目でマリーを見やった。

「マリー。メリーウェザー氏に会うぞ。話を聞きたい」

「ええっ？ ま、待ってよ、アーサー君。何度も言ってるけど、そう簡単に会える相手じゃないのよ。」

慌てふためくマリーを余所に、アーサーは視線を彼女から銀助に向ける。「な、なんですか？」と焦る銀助。しかし、アーサーはそのまま無言で、視線を足下に落とした。

床の上。のんびりと鰻のパイを囓る、ワガハイに。

アーサーの思惑に気付いたコナンが、「あ」と間の抜けた声をもらした。

*

「……反応がない。どうやら気付かれましたか。勘が良いですね」

時間を確認していた懐中時計の蓋を閉め、夜会服タキシードの男は座っていた椅子から、ゆらりと立ち上がった。

薄暗い部屋の中、両腕を上げて身体を伸ばす。

それから窓に近付き、カーテンを開けた。

陽光が照らす室内には、必要最低限の家具だけが置かれている。がらんとした印象は、まるで使われていない物置のようだ。実際、物置と表現しても語弊はない。この部屋は市内に無数に用意されている隠れ家のひとつに過ぎないのだ。

男は窓の外を眺める。すでに日は傾いている。直に目の前の通りにも、ガス灯に火が停まるだろう。通りの先には、《ロンドン・キャット・コンテスト》の会場となった、トラファルガー広場がある。すでにコンテストは閉会しているが、いまもまだ人だかりは残り、祭りの後の空気を楽しんでいる。

「さて。あちらもずいぶん動いているらしい。また、手を回す必要があります」

*